



荘厳な境内に織姫伝説
織物業者らの信奉厚く

白瀧神社

川内町五丁目、山田川に架かる白瀧橋を渡り切った奥に「白瀧神社」は鎮座している。境内からは鳴神山の双耳峰が遥かに望め、樹齢300年を超えるケヤキを背後に従えた社殿は荘厳そのものである。

桐生織物の発祥に関わる神社として広く知られる。社伝では「永久年間官女白瀧という、故ありて女人仁田山の舎人（とねり）に嫁し常に絹布を織ることを好み、その業精巧ならんことを欲し、八千々姫に祈りて遂に宮殿を造営せり、女世を去って後村人祭祀して白瀧社と称すという」とある。この社伝の成立がいつの頃かは不明であるが、江戸時代後期には桐生織物を宣伝するための「白瀧姫伝説」が生まれた。織物業者たちの信奉は厚く、毎年8月の例祭には織物関係者の参拜者で境内は賑わう。

神社と織物業界とが深く関わったのが、佐羽喜六らが率いた日本織物株式会社との関係。明治20年（1887）に設立された同社は日本における洋式大工場の先駆けであり、工場敷地内に白瀧神社を勧請して「織姫神社」を建立、明治28年（1895）に遷座式が開かれた。しかし、なぜ「織姫神社」という名称にしたのか、活人形師安本亀八作の白瀧姫像の来歴とともに謎は多い。本殿裏の石柱の間に、日本織物株式会社が柱を百本寄付したという石碑が残され、佐羽喜六の名も刻まれていることから、日本織物株式会社との緊密な関係が見て取れる。

樹高20メートルの大ケヤキは桐生市指定天然記念物、神社に伝わる「白瀧神社太々神楽」は桐生市の指定無形民俗文化財、鳥居脇の巨岩は耳を当てると機音が聞こえるという伝説がある「降臨石」、これらが一体となり、厳かな神域を形成している。



織姫伝説に包まれた白瀧神社境内、降臨石は圧倒的な迫力がある

●場所／桐生市川内町5-3269